
首輪付きが横浜基地入り

馬手男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

首輪付きが横浜基地入り

【Nコード】

N3206Z

【作者名】

馬手男

【あらすじ】

アーマードコアfAのリンクスがマブラヴオルタ（アンリミ）の世界入り。細かい事は気にしないで下さい。
ネクストTRUEE出来るんじゃないかね？って思っただけです。はい。

戦士の目覚め（前書き）

アーマードコア知らない、もしくはマブラヴ知らない、という方には少々解りにくい所が多いかもしれませんが、これはこれで、二次創作ながらに1つの、「個」としての作品として練り上げて行きたいと思えます。

戦士の目覚め

首輪付きは今日も目覚める。

またセレンさんに絞られてミッションか……。と。
思った矢先、異変に気が付いた。

自分の部屋は飾り気が無く、セレンもいつも「少しは茶目っ気を見せてみる。」と呆れる程閑散としているが、今日目覚めてみれば埃立っていて、なおかつ壁には無数のヒビ、そして何より、自分の部屋ではなかった。

コジマ汚染の危険を承知で、外に出る。

見回せばACのヘッドパーツの様な物が転がっており、ネクストやノーマルの様で「見たことのない」機体に似た何かが、瓦礫に扮していた。

そして、新たな異変に気づく。

見知らぬ土地であると共に、「コジマ汚染の影響を感じない」のだ。

足音がする。すかさず振り向くが、訳が解らなかった。

何せ、生身の人間が銃を持ち、こちらに卑しい笑みを浮かべていたからだ。

自分がここを認知できないなら、相手も知らないだろう。

ましてや、装備をしていない。軍人らしき彼等にとっては、目の前に生肉を放られた肉食獣の様な状態だろう。

両手を上げ、抵抗の意志は無いと示す。

二人組は、何か話し合うような素振りを見せ、話し始めた。

「お前、どこの所属だ？許可証と認識票を提示してくれ。」

「何の事だ？俺には、そんな物は無い。」

二人組は、見合わせると

「そうか、動くなよ。どこのどいつかも分からんお前を野放しには出来んからな。」もう一人が背後を指し、

「ああ、向こうの基地には指一本触れさせる訳にも行かねえからな。」

「おいおい、基地の場所を明かしちまっつていいのか？まあ、いいか。ここで消えてもらうから、なあ！」二人は襲いかかってくる。

だが、首輪付きは冷静に一つの判断を下した。

一人目の右足を踏み、首もとに肘を入れる。入った。

そのまま気絶した兵士を盾に奪った銃を構える。

二人目は怯む、その隙に、《ダラダダダ！》

接近がたらら発、わざと外す。

すると相手は予想以上に足止めを食ってくれた。

腹部に、内蔵を傷めない程度に拳を叩き入れる。

「かはっ……。」

とっさに二人の兵士を倒した首輪付きは、質問を下す。

「信じてくれ、俺はスパイでも何でもない。おかしな話だが、気付いたら此処にいた。頼む。あんた達の基地に連れて行って、仲間にもしてくれ。」

呼吸を整えながらに、兵士は答えた。

「俺たちに、そこまで権限はない。基地まで連れて行っては、やるが、先ず、捕虜になってもらう。話はそこからに、なると思っぜ。」首輪付きは頷く。

「ああ、いいだろう。ではよろしく頼む。面倒は嫌いなんだな。」

『国連太平洋方面第十一軍、横浜基地』内部。

「姓名、認識番号、階級、生年月日を答える。」
周りに数人おり、その中でも大柄な黒人が、ライトをこちらに向けつつ、言った。
隠すことも無ければ、言わない謂われもないので、首輪付きは答える。

「名前は星宮晴秋、ほしみやはるあき認識番号は、無い。階級はカロードランク2位だったがオツツダルヴァの行方不明につき現在1位。ORCAランクは2位。生年月日は、5月20日。年齢は19歳だ。」

「認識番号だけか、無いのは。隠してるんじゃないだろうな？」
「ああ、無い。聞かれれば答えるだけ答えよう。だが、知らないものは知らない。」
黒人は、考え込む。

「分かった。後はこちらで審議する。恐らくはこんなカビ臭い所からは出れると思うが、先は辛えぜ。」
「そう言い残すと、早々に男達は出て行った。」

数日間、捕虜収容所にて過ごしていると、一人の女性が来る。

「さ、もう出られるわよ。ただし、無条件に私に従って貰うわ。返事は、イエスかノーか。」

晴秋は答える。

「イエス。」

「さて、あなたの取り調べに対して、不都合な点が幾つかあったからここでまた、私の質問に答えて貰うわ。理由は、話せないけど、きつといずれわかる事だし。」
「そうそう、私の名前は香月夕呼。」

香月博士でいいわ。一応、この基地での最高権限者よ。」
一息。

夕呼は言う。

「まず、あなたが始めに居た場所。あそこに破損した戦術機の他に
もう一つ、状態のいい機体があったわ。あれはあなたの？」

「ああ、そうだ。俺のだ。戦術機・・・と言うのは知らんが、きつ
と俺のネクストと似たモンだろう。」

夕呼は、眉を顰める。

「ネクスト？それは一体何？」

晴秋は答えた。

「ネクストってのは・・・」

こちらの元いた世界についてや、その技術などの説明に、3時間近
くを要した。

「なるほどねえ。ま、いいわ。嘘かホントかは解るし、いいわ。貴
方にはあたしに近いレベルのセキュリティパスを与えるわ。そのパ
スを使えば厨房と女子トイレを除く、大抵の場所に行けるわ。」

晴秋は言う。

「そうか。それなら話は早いな。あんたが解ってくれる人で良かつ
たよ。」

夕呼は付け加えて、

「そうそう。機密の閲覧権は低いから、変な探りを入れようとも、
無駄よ。ま、あたしに従ってさえいれば、貴方は特別な人間なの。
だから、それこそ内緒よ。」

夕呼はおもむろに立ち上がると、

「じゃ、貴方がこの先過ごすところに行くわよ。」

外に出る。

晴秋は、僅かな期間とはいえ、幽閉されていた。だから、青空を仰

ぎ見れるのは清々しく感じた。

埃っぽいが、コジマ汚染よりはマシというものだ。

「そうだ、俺は訓練兵になるとか言ってたよな？」

まだ世界を転移したばかり、不安もあるだろうと夕呼は思い、丁寧
に答える。

「正式には国連軍横浜基地衛士訓練学校第207衛士訓練分隊。簡
単に207訓練分隊とか、207隊と呼んでるわ。」

「衛士・・・って何だ？」

晴秋は質問する。

「貴方にわかりやすい言い方なら、リンクスっていうのとはほぼ同じ
ね。」

「なるほど、そうか。」

一通り辺りを見て回り、夕呼が言う。

「そろそろ射撃訓練場へ行くわよ。」

射撃訓練場で、207隊の面々、白銀武、御剣冥夜、珠瀬王姫、榊

千鶴、彩峰慧、5人の紹介をされ、晴秋の紹介も住んだ。

武は、自らと似た境遇にある晴秋に共感を得ていた。

「晴秋、これからよろしくな。」

「ああ、こちらこそ。よろしく頼む。」

こうして射撃訓練に戻った面々だが、晴秋の銃器組み立て、射撃の
才はなかなかのもので、その身一つで戦場に居たのでは、と思わせ
る程であった。

狙撃銃の訓練も、珠瀬程ではなかったが、かなりの腕であった。

戦士の目覚め（後書き）

メインの投稿があるので、此方はかなりローペースです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3206z/>

首輪付きが横浜基地入り

2011年12月11日02時46分発行